第８期 第13回 静岡市行財政改革推進審議会　会議録

１．日　　時　令和２年３月24日（火）　16：00～17：00

２．場　　所　静岡庁舎新館８階　市長公室

３．出 席 者　【委員】

田形和幸会長、岩井泰次郎委員、植田眞委員、内山和俊委員、
小泉祐一郎委員、小島孝仁委員、坂野真帆委員、鈴木貴子委員、
西尾真治委員

【行政】

田辺信宏市長、
豊後総務局長、渡辺総務局次長、大長総務局理事、望月広報課長、
大石観光交流文化局長、田中観光交流文化局次長、
岩田歴史文化課長、久保田観光・国際交流課課長補佐、
宮原都市局長、安本交通政策課長　他

〔事務局〕

初田総務課長、降矢行財政改革推進係長、金原主査　他

４．会議内容

(1) 開　会
(2) 審議会からの答申
(3) 委員と市長との意見交換
(4) 第３次行財政改革後期実施計画の改訂について
(5) 閉　会

審議会内容は以下の会議録のとおり

≪略：審議会からの答申≫

田辺信宏市長：すばらしい答申をいただいたことを厚く御礼申し上げる。経済人の方々が中心の今回の行革審であった。忙しい時間を縫って行革審に尽力いただいたことを厚く御礼申し上げる。事前に答申案を拝見させていただき、今後の行政に反映できる大変プラク

ティカルな提言をいただいたと心強く感じている。よく、一点突破、全面展開と言うが、昨年度の一年目は登呂というキーワードで一点突破の提言をいただき、それをベースに昨年９月に私がそれを全市的にネットワーク化するという諮問をしたところ、半年間という短い時間であったが、さっそく翌月には駿府城公園の視察に行っていただき、情報の共有化を図った上で、遠方から来ていただいている西尾委員も交えたうえで侃々諤々の議論をしていただき、今日このような形でまとめていただいた。そういう議論の中では陪席させていただいた行政の職員も様々に触発されたという報告があった。取りまとめに当たっては行政の職員もいろいろとコミットメントさせていただき、官民連携の答申ができたと思っている。

その中でも、いま会長から御説明いただいたが、答申案 20 ページ、最後に目指す姿の実現に向けて資源のさらなる磨き上げという中で、日本一という、とがったものを作るという項目があった。このとがったものということについて、後ほど少し私との意見交換をさせていただきたい。行政を巻き込んで議論をしていくと段々角が取れて丸くなるものだ。そうではなく、民間の発想のとがったものをとがった状態でどう次の施策に繋げていくか。すでに第４次静岡市総合計画の議論が各部局で始まっているし、民間の中ではとがった試み、例えば小島委員が用宗地域をターゲットにした投資をしてみたり、街中を利用しての投資をしてみたり、様々な独自の民間ならではのビジネスをしてくださっているので、それと行政がどういう風に連携できるのか、そんな議論が後ほどできれば、それもこの文章に現れていない活きた今日の成果として参考にしていきたいと思っている。

先ほど雑談の中で新型コロナウイルス感染症の話題が出たが、必ず新型コロナウイルス感染症は終息する。春が来ない冬はないし、朝が来ない夜もない。いまは辛抱の時だが、逆にピンチはチャンスでもあるから、今こそこういうときにじっくりと自分を見つめ、静岡市を見つめ、何か膨らませておくエネルギーを蓄えておいて、今はオープンのときに大変ピンチかもしれないが、必ず、長い目で見れば、あれがあったからこそ溜めができて伸びた、と言ってもらえるような地域活性化に繋げていくための答申にしていきたいと思っている。ぜひ今後とも御指導、御鞭撻いただくようお願い申し上げる。

事務局：続いて委員の皆様と市長との意見交換をさせていただきたい。ここからの議事進行は田形会長にお願いしたい。

田形和幸会長：せっかくなので、委員からひと言ずつお話いただきたい。

小泉祐一郎委員：大変勉強になった。田形会長始め委員の皆様は企業経営をされ、それぞれの分野でご意見があった。それから事務局の皆さんが大変熱心にやられていたので驚いた。私も他で活かしたい。

内容的にはテーマ設定も時宜を得たというか、すばらしいもので検討もしやすかった。一つだけお願いになるが、これまで 30 年くらい全国の街づくりの事例を見る中で、こだわりとしぶとさが大事だと考えている。うまく行ったところと行かなかったところの違いは、２、３年とか３、４年やって、ほどほどでやめてしまう。うまく行ったところは大

体10年くらいかけてしぶとくやっている。例えば石垣だとか、道路に現地案内として東海道の表示を貼ったりなど、こういう良いこと、特徴的なことはこだわりとしぶとさを持ってやっていくと、10年くらいで花が咲くのではないか。ここがどうも、静岡県内全般的に、4、5年経つと目先を変えてしまう。せっかくもう少し踏み込んで尖って行くところが中途半端になっている。是非そういった視点で取り組んでいただきたい。多少、批判を言われるくらいの方がむしろ反響があるということだ。その辺りは気にしないでやっていただきたい。

もう1点、市長から一点突破、全面展開という話があったが、まさにこの2年間の検討は特定のテーマ、施設を検討したが、おそらく色々と幅広く活用できると思うので、今回の答申については全庁的に展開していけるのではないか。

それから市長にお願いになるが、予算措置を継続的にやっていただきたい。

最後に、行革審の進め方という中で、こういう風にテーマ設定をしてやるのは非常にすばらしいことで、これは静岡方式だと思う。ときには、ある施設をモデルにして全面展開する方法も一つだが、もう一つは共通的なテーマで施設の有効活用とか、横断的なテーマを、市長がおっしゃっていたように、かつてのようなスリムの観点ではなく、今度は伸ばす方の観点で行革の横断的なテーマでやっていくことも効果があるのではないかと思う。

岩井泰次郎委員：登呂に引き続き、静岡という街に住みながら本当に静岡のことを知らないということがよく分かった。私も印刷業という広報の端くれの業種にいながら、なぜこんなに広められないのだろうかと思っている。今は個人からも発信できるような時代であるにもかかわらず、フェイスブックやツイッターで自分の仲間には広げられるが、その他にはなかなか広がらない。これから静岡の魅力を発信していく意味でも、それを頭のどこかに置いておかないと、なかなか伝わっていかないのではないかと感じた。

とがった一点突破というのは非常に大事なところで、私がずっと登呂の頃から言い続けてきたことは、その一点があり、ついで買いを誘発するようなインフラが整っていれば、こんなものもあるのだとなる。最初の切り口となる一点が駿府城の石垣でも何でもいいが、そういうところをとにかく際立たせておいて、誘客できる形にしておく。それで、静岡市内に泊っていただき、ついでにあそこに行ってみようかとなるといい。それから、ＳＮＳでのインフルエンサーの力なども借りていければいいのではないか。その一点突破だけは市長にお願いしたいところだ。

植田眞委員：市民委員として参加させてもらった。いろいろなことを聞くことができたし考えることができた。非常にいい時間を持たせてもらったと思っている。10年程前に神戸から静岡に来たが、静岡にはものすごくいい所がたくさんあるのに、自分たちがいい所ということをあまり理解していない。非常にいい街で、気候はいいし、富士山はあるし。いろいろな良い点があるのに、それはもともとあるから大したことはないと思っている。

とがったところに関しては、一つは葵舟だ。観光で今はイベントがあると葵舟を動かして、一人1,500円で乗ってもらっている。やはり、そこにプラスαを付けないと経済的な

効果は出てこないということで私も提案させてもらったが、そこに写真や結婚式だとか、いろいろな記念になるような、もっと大きく言ったらパレードのようなものが葵舟を使ってできるとか。観光客を誘致するというのは非常にいいと思うが、近隣の人達がそこでいろいろなことができて、プラスαの収益があったらいいと思っている。何か成功事例があって、それに対して、先ほど皆さんが言ったように、そこにどんどんいろいろないい点が集まって来るような形にしたらいいと思う。

もう一つ最後に、前にも言ったが、静岡というのはタダの文化がある。持続的に10年20年という形でそれを推し進めていこうとすると、メンテナンスもいるし、リフレッシュもいる。正当なお金を取るというところも少しやっていったらいいと思う。

内山和俊委員：たまたま現役の観光ボランティアガイドをやっている。3月20日に東御門の下でガイドをやったが、新型コロナウイルス感染症の影響もあったが、100人くらいの方にお会いした。その70%が県外の人だった。東京、神奈川、関東圏の方が多くて、朝一番に来訪される方は、百名城スタンプや御城印をもらいに来ている。来訪された皆様の感想は一様に、すごいですね、この石垣は何ですかと、驚嘆の声をあげていた。行財政改革推進審議会の議題も、昨年は登呂博物館、今年は駿府城公園ということで、観光ボランティアガイドとしては非常に楽しかった。先日、登呂博物館の館長さんに会ったが、入館者が3,000人増えたと言う。新型コロナウイルス感染症の前のことだが、取組の成果が実ったと喜んでいた。

今度の駿府城公園のことで2点ほど申し上げたい。1点目は人材育成の関係で、私は観光・国際交流課が実施している観光ボランティアガイドの講習会の1期生だ。今、駿府ウエイブは会員が91人いて、今年は3期目で約30人、約3割が静岡市の人材養成塾を卒業した。あと数年経ち、2022年の歴史文化施設の開館時には相当数のガイドが養成できるのではないかと頑張っている。

それからもう一点、駿府城公園の現場を見ていると、見せ方がまだ少し足りないと感じている。見える化の推進ということで、北御門跡と二ノ丸御門跡の所にある石垣の刻印ですが、現場には案内表示が何もない。現場に皆さんをお連れすると、こんなすごい刻印があるのかと感嘆される。二ノ丸御門跡の石垣にはローマ字の様な刻印があるから、ひょっとするとキリシタン大名のものか、というような質問がある。そこで見える化の推進ということで、誰が来てもはっきりわかるような案内表示を設置するなど仕掛けが必要だ。

もう1点、静岡市は、来年度は100人以上の職員が入庁されると思う。新人職員の方に、駿府城公園を中心とした歴史観光の研修をぜひ実施していただきたい。歴史文化施設が出来るまでに、これから3年間かけて歴史文化施設と駿府城公園を積極的にＰＲしていただきたい。

西尾真治委員：外部からの参加だったが、毎回ここに来て色々な話を聞くのがすごく楽しかった。ここに来れば来るほど静岡市のことが好きになって魅了されていった。こういうことが、シビックプライドが醸成されていくということなのかなと感じた。

今回の審議会において、昨年も今年も続いている大きなテーマは、文化力を経済力に変えていくことだ。何がその原動力になるかというと、一つのキーワードはシビックプライドだと思う。答申の全体を見たときに、この中で一番大事なキーワードは「磨き上げ」という言葉だと思った。情報発信とかアクセスももちろん大事だが、そもそも資源に魅力がなければ、いくら情報発信してもアクセスをよくしても人は集まらない。一番重要なのは、いかに資源を磨き上げて魅力を作っていくかだが、この磨き上げを誰がやるのかが非常に重要だ。これは行政だけでなく、むしろ市民や民間の方が主になって磨き上げをやることになれば、大きな展開の違いが出てくる。具体的な取組の案は、様々な専門家の方のアイデアなので、何をやってもよいのではないかと思う。本気でやれば、どれでもものすごく大きな効果につながる。むしろ、何をやるかというよりも、誰がどうやるかが重要だと思う。これを行政が主導でやっていくだけでは、どんなによい種でもなかなか育たない可能性がある。いかに民間主導、住民の方を巻き込んで、シビックプライドの醸成と重ね合わせてやっていくかを検討していくことが大事だ。

私は答申書の中で、「最後に」というページに集中的に意見を出させていただいた。とがったものを作るときの体制づくり、仕組や仕掛けづくりに力を入れていくことが、この提案をより生かしていって実効性のあるものしていくポイントだと思う。この審議会のように、静岡を愛する人が集まってみんなでワイワイガヤガヤ、アイデアや意見を出しながら一緒にやっていくということも、よい成果につなげるための取組になると思う。

鈴木貴子委員：この２年間を通して様々なことを学ばせていただいた。特に今年度に関しては、本当に静岡は富士山、そして家康だというのを実感する一年だった。私自身は県外の方や海外の方と接する機会が多いのだが、彼らと話をしても、やはり静岡出身であり静岡に住んでいるということを改めて誇りに思う機会が非常に多かった。海外の方に関しては、美食家の人達にとって静岡がこれからまた注目されるのではないか。多くの外国人の方が東京や京都を散策して楽しんだが、それはもうお腹が一杯というときに、静岡の美味しい食とお茶が魅力的であり、またオクシズの方に行くと、茶農家さんに直接触れ合うことができ、そこで静岡の歴史文化を感じることができて興味深いという話もあった。

最近Ｚｏｏｍで海外在住の日本人女性たちと話す機会があったが、彼女たちが何に興味があるかというと風水だった。最後に意見を求められたから、静岡市は徳川家康が風水を用いて最初に作った街づくりで成功したところだと言った瞬間、彼女たちは驚いていた。そういう話をすると、静岡に今度行ってみるという話になる。静岡というのは日本平があり、東照宮があり、駿府城公園には昔の駿府城があるという話をして、位置的関係や風水がどうという話をすると、すごく関心を持ってくれた。一昔前、歴女という言葉がはやった。ここ最近は風水や占いなどスピリチュアルなものに関心がある女子も多い。そういうところから、別の切り口でＰＲができるのではないか。日本だけではなく、海外に住んでいて、風水は中国、台湾、東南アジアの華僑の人達も大変関心のある分野だ。特にビジネスで成功している華僑の人達は風水をかなり熱心にやっている。そういったところ

で、実は静岡は風水でまちづくりが成功したということで、駿府城公園、静岡の街づくり、どういう風にして歴史的に成功したのかというのを発信できるのではないか。

また、今回のテーマである歴史・文化資源を考えたときに、昨年、内閣府の青少年の事業に携わったときに、与えられたお題が自国文化とアイデンティティ、多文化共生だった。まさしく自国文化を考えたときは日本文化だったが、その中で学生達に言ったのは、自分たちの出身の所を考えてと話をした。そこで私自身も静岡の文化や歴史を見直し、彼らにも話し、海外の人にも話し、どのような形で文化やアイデンティティが形成されていくのか、特に若い世代の人達にとって自国あるいは地元のアイデンティティを形成していくということ、誇りを持つということが大切だと改めて感じた。今、静岡は人口流出問題を抱えているが、若い人達にいつか静岡に戻ってきてもらうためにも、静岡が魅力的な街で、いろいろなポテンシャルがあるということ、そして、県外の人達や海外の人達に誇れる魅力的なものを持っているところであることを伝えていくことも大事だと思った。これからも静岡が魅力ある街として、このポテンシャルをもっと発信していけるといい。

最後にＳＮＳの活用について、今回の審議会で何度も話をしてきたが、私が趣味で開設したあるＳＮＳのアカウントに、静岡市の情報を英語で発信しているサイトがある。ここ数カ月全く更新していなかったにもかかわらず、ここ最近、特に新型コロナウイルス感染症の問題が出始めてから、毎日数人の海外の方々がいいねを押してくれるようになった。何をきっかけにこのサイトにたどり着いたのか分からないが、今どこにも外に行けないからこそ、ＳＮＳなどの情報を検索しながら、写真などバーチャルで旅行を楽しんでいる外国人の方が多いのではないかと感じた。この機会にぜひ皆さんも、ＳＮＳで富士山や駿府城公園をアップすることで、魅力ある静岡を伝えていけるのではないかと思う。

坂野真帆委員：大変勉強させていただいた。資源を磨き上げて日本一と言えるとがったものということだが、日本一と言えるかどうかは分からないが、日本唯一ではあると思う。歴史は紛れもなくここにしかないものということを考えると、それをどう生かしていくかが地域力に繋がると思っている。まさに今、石垣を見て圧倒されるように、具体的に目に見えて分かりやすいものが出てきているのはすごく追い風だと感じる。歴史はどうしても現場にいても何も見えないから想像するしかないが、想像をかき立てるようなものが出てきているというのは、一番の分かりやすさだと思う。唯一のもの、どういうものが静岡の宝なのかを分かりやすく、まず市民が理解するというのが一番だと思っている。長靴をはいた猫という物語があるが、村人たちにみなこれはカラバ侯爵様のおかげだと言いなさいと猫が言う。そうして、皆がそう口々にそう言っていると、後から来る王様たちがそれを信じて、カラバ侯爵はすごいのだと思うようになる。市民がみな静岡のこの歴史、この石垣を見てごらんと言うようになれば、外の人たちは絶対にそれを見たくなる。市民がどれだけそれを大切に思うか。さらに、歴史というのはただそのものだけ、例えば徳川家康公が作ったということだけではなく、その時代に生きていた自分たちの先祖がいる。例えば、商店街に仕事で関わっているが、412 周年を迎えたお店などがある。実際に家康

さんと来てここで商売を始めて、いまだに商売されているお店がある。それぞれがリンクして歴史を持っている。だから、「すごいね」と言われる歴史に自分が関わっているという実感をどれだけ持ってもらえるか。そういうことにつながるような事業ができればいいなと思っている。その実感を持っていただくと、お客さん側だった人が今度は主催側というか、自分たちが自主的にそれを発信したり、それを咀嚼して新しいものを生み出したりというように発展できると思う。ガイド養成講座のこともあると思うし、天守台の見学会にすごくたくさんの方が来られているし、今度新しくできる施設も、市民の方が自分の施設だと思ってもらえるような施設になってもらいたい。そういう所が幅広く発信する拠点のようになればいい。施設関連のフォーラムでは、市長が開口一番に規制緩和のことをおっしゃっていた。他にはないような公共施設になれば、それが起爆剤になって、歴史文化のある街を市民が自慢して、自発的に発信していくようになっていくと思う。

小島孝仁委員：２年間ありがとうございました。私はベンチャー代表という立場で呼んでいただいたと思っている。皆さんがおっしゃったように、日本一と言われるとがったものを作るというところに最後は行き着くと思っている。用宗は事業をスタートして、あと数か月で３年経つ。「日本色」に関しては年々、稼働率も客単価も売上も上がってきている。この新型コロナウイルス感染症の状況の中でも、３月は116%、２月は147%だった。キャンセルもかなり入ったが、それ以上に予約が入った。海外に行くのをやめて来たとか、ディズニーランドに行くのをやめて来たとか、分散型ホテルということもあり、他の宿泊者の方と会わない。それから飛行機などを使わずに車で来られる。集計では東京が１番で静岡県が２番だ。非常に静岡市内も多い。次に名古屋、愛知、横浜、神奈川という順だ。用宗の飲食店にも状況を聞いているが、影響をほとんど受けていない。ただ、中心部、街中は非常に打撃を受けていて、本業が不動産で色々なビルの管理をしている関係で、毎日のように家賃交渉が入ってきている。営業マンも大家さんと家賃の調整に追われているような現状だ。用宗はもともと人がいなさそうなイメージもあるが、飲食店も本当に影響を受けていないと言っている。街中は大体５割くらいという声が多い。ただ、ここ10日くらいは人が戻ってきているという印象を受ける。入っている店は満席だ。やはり強い店は強いのだと感じた。最近、新聞などにも色々と取り上げていただいているが、街中の空き店舗を活用したビル泊、先日内覧会もさせていただき、合計140、150人近くの方に来ていただいた。そのうち50、60人はおそらく市の方で大変熱心に見学していただいた。スタートが非常に良くないため、まだ市役所の方から許可が出ずにオープン日が決められずにいるが、新聞は各紙取材をしていただき、テレビ局からも続々と取材の要請が入っている。某メジャーなテレビ、ゴールデンタイムのキー局でも取り上げていただけそうなくらいかなり話題になっている。これも単なるソフトだけではない。呉服町商店街を映画やドラマに出てくるようなホテルのポーターのユニフォームを着て、金のカートでお客様の荷物を載せて商店街をずっと歩いていく。お店の前に立ち止まった時に、お店の人が出てきて、どうぞと何かを渡していただくとか。呉服町の名店街の宣伝部の方たちと、店

の前に看板を置いていただいて、ようこそ静岡へ誰々様とか、そんなことも一緒にやっていただくとか。そんな話もしている。最後は人だと思う。静岡は本当に民度が高い。おもてなしをするＤＮＡがあると感じている。私がベンチャーで起業して 11 期目に入るが、静岡市はベンチャーにとってすごくいいと感じている。何がいいかというと街のサイズ感だ。もう少し大きな街になると、ベンチャーが市長と話をする機会はそうそうない。色々な大企業の社長、会長にお会いすることもないと思う。でも、何か頑張っていれば理事長などにもお会いできたり、直接ベンチャーの声が届くというサイズ感である。これより小さいと、もっとやりやすいかもしれないが、全国に与えるインパクトは弱いと思う。ちょうど今、時代の折り返し、踊り場だと思っているので、ここがチャンスだと思っている。ここで、全国に羽ばたける事業を個人的にはやっていきたいと思っている。ビル泊はまだオープンもしていないのに、県外のある会社からフランチャイジーをやりたいという話も出てきている。新規事業をやるときは、今までにないものをやろうと常に心賭けてやってきている。とがったものをやるときの難しさは、ほとんどの人に反対されることだが、それをどう突破するか。特に行政の持っている財産、土地や建物を変えていくというときのとがったものをやることはすごく難しいことだと思う。そこを何とか丸めないで、貫いてやっていっていただきたい。

田形和幸会長：審議会からの答申については以上をもって終了したいがいかがか。

田辺信宏市長：大長理事が総務局長のときにこの第８期が始まった。駿河区長、総務局長という役職の中で登呂にこだわって、「ないものねだり」ではなく「あるもの探し」をしたいという一点突破で、今回の田形行革審が始まった。今の委員の皆さんの発言を聞いて本当にやってよかったと感じている。９人それぞれから、幅の広い御発言をいただいた。ベンチャー、経営者、大学教授、元行政マン、県外からのシンクタンク、女性委員、色々な多種多様な方々が２年間の議論をしていただいた。

私がすごくうれしかったのが、勉強になったとおっしゃっていただいたことだ。それぞれの委員同士の議論によって啓発があっただろうし、職員との議論の中で勉強になったとおっしゃってくださったのかもしれない。忙しい時間の中で来てくださり、そうおっしゃっていただけるというのは、こういう志のある方々が集まって議論を始めると、エネルギーをもらったりあげたりという一つの蓄積ができる。職員の立場としても、民間の皆様からの様々な御意見の中できっと勉強になったと思っているはずだ。民間と公務員は立ち位置は違うが、こういう交流も必要だと思う。そういう中でとがったもの、最後に小島委員から自らの取組の話を聞いたが、行政のレベルでは「日本色」まではいかないが、本当に小さな市民グループの一人が、中堀に舟を浮かべて観光資源にしたら面白いのではないか、そういうとがった意見から始まった。最初、我々行政の受止めは、できるはずはないというものだった。様々な制約がある中で、行政の中ではリアリティのないものに感じていた。そうした中、都市局が何とかやってみようと、若手職員を中心に、規制緩和や環境整備を行い、運航に向けては局間連携で、観光交流文化局にバトンを渡す形にして、

今では権威ある行革審の議論になって、ここでさらに、先ほど植田委員から話があったように、葵舟を結婚式の記念写真などのイベントでもっと活用してはどうかというオーソライズまでされるようになった。ビル泊や「日本色」、民間の様々なビジネスがあるので、行政のファンダメンタルをどう生かしていくかということでまたお力をお借りしたい。ＳＤＧｓの17の目標があるが、一番重要なのが最後のパートナーシップで実現しようということだ。何事も一人では実現できない。行政だけでやってもできない。やはりパートナーシップを取ることによって大きく夢が実現していくのだと思う。政令指定都市のサイズ感が、ちょうど全国、世界にアピールする意味でも良いサイズなのだと思っている。今回の答申を受けて、実際に我々もここから発想していく。今後ともぜひ見守っていただきたい。都市局長と観光交流文化局長からも今後の決意の一端を聞かせていただけるか。

宮原都市局長：今日はありがとうございました。先程、規制緩和の話があったが、国も規制緩和が進んでいて、例えば、しずおか焼津信用金庫のビルのお堀側の方に今、水辺デッキをやっている。ああいう所の公共空間を民間に方に任せて、カフェなどをやる。あとは、パークＰＦＩということで、公園の一部も使えるような形で色々とやっている。

また、ＭａａＳやシェアサイクルの交通の分野については、我々は生活の足の確保ということをかなり言っていて、昨年はＭａａＳの実験をやったり、シェアサイクルも都心の方から連休をめどに今年始めていく予定だ。観光については、活用した形で発展していくのが大事だと思っている。ぜひ、この歴史文化を活用したいい街にしていきたいと思っている。

大石観光交流文化局長：昨年の登呂に引き続き御審議いただき、お礼申し上げる。先程職員の話が出たが、登呂博物館の職員の意識が相当変わった。予算要求に向けて本当に一生懸命、自分達がアピールしていくのだということで、来年少しだがそれを実現する。あそこの前の広場を芝生化することを考えている。担当職員がこれに刺激を受けてできたのが良かったと思っている。

今年はもっと大きなテーマということで、今回いただいた提言書の中に、とがったという言葉もそうだが、私は特別感という言葉が相当引っかかっている。色々なところで特別感という言葉を使っていただいている。特別感が出せるような、ここでしか味わえないような駿府城周辺のエリアにしていきたい。今後、歴史文化施設、市民文化会館、駿府城公園の中のフィールドミュージアムと色々とつながっていくので、市民の皆さんと一緒になって考えていきたい。

葵舟は民間活力を使わせていただくこのエリアでは第一号になると思う。今年の10月から運航を開始したいということで４月以降に公募をかけていく予定だ。基本的なところは市がお膳立てをして、規制緩和をし、ハードを用意した中で、運営は民間の方にお任せするということで、いただいたアイデアを有効に使って活性化していきたいと思っているので、今後とも協力をよろしくお願いしたい。

田辺信宏市長：先程、内山委員から少し御紹介があり、最後は人だという話もあった。街づ

くりは人づくりだということだ。人生100年時代で、稼ぎたい人には「ネクストワーク」という高齢者就労の窓口を作り、社会貢献をしたいという人には、リカレント教育の一環としてスキルをつくるための「シチズンカレッジ」というものを開講している。先程、内山委員がおっしゃったのは、6ページ下段（注：静岡シチズンカレッジこ・こ・に講座案内2020パンフレット）にある観光ボランティアガイド養成講座だ。ここでカリキュラムを終了したら、駿府ウエイブで県外からのお客様に対して観光ガイドができる。かなりの方々がこれを終了した後に駿府ウエイブで活躍している。またぜひＰＲをお願いしたい。一人の百歩よりも百人の一歩でこの街づくりをパートナーシップで実現していきたいと思っている。一人の葵舟の発想が、行革審の論点になりオーソライズしてもらった。この伝統ある行革審は、市民の一つぶやきではない。議会も一目置く行革審であり、重みのある答申だ。ここまで仕上げていただいたことに重ねてお礼申し上げ、事務局も頑張ったということを最後に市長から皆さんにお礼申し上げ、失礼をさせていただく。

事務局：市長についてはここで退席させていただく。

～市長退出～

田形和幸会長：次の議題、第3次静岡市行財政改革後期実施計画の改訂について、事務局から説明をお願いします。

≪略：事務局説明≫

小泉祐一郎委員：行財政改革について、やっていることが市民に見えているだろうか。せっかく頑張って取り組んでいることが、もう少し市民に分かってもらう必要がある。行財政改革は市民にも痛みを伴う話であり、場合によってはこのサービスは減らしてこちらに力を入れる、ということもある。そういった意味では、市民に協力を仰いでいくような方策を考えていく必要がある。

内山和俊委員：資料2の右下の将来の負担の軽減に「道路橋の長寿命化の推進」がある。コンクリートの橋などは耐用年数50年などと言われているが、すべてがそうはいかないので長寿命化をされていると思う。これについて、一般の市民の方で、自分の家の近くの橋は50年経っているが大丈夫か、といった疑問を持っている方が結構いらっしゃる。それについて、それぞれの自治会の総会などの集会で、安全性を積極的にＰＲしていただいて安心感を与えていただきたい。

西尾真治委員：行革に取り組んでいるからには、どれだけの効果が出ているかを端的に説明していく必要がある。その上で、今回改訂をするとのことだが、なぜ改訂するのか、変えた内容は書かれているが、なぜこれを変えることになったのかが書かれていないので、評価のしようがない。今までやったことを振り返って評価をし、次にこういう改善

をするという一連の流れがあって初めて改訂する意味がある。改訂の理由や背景を説明した方が理解しやすいと思う。

あと気になるのが、上方修正し、効果額を上げているからいいだろう、という風な記載に見えるが、中身を見ると、収入増が市税等の収納率の向上であり、一方、削減について詳細は分からないが職員数の増減が要因になっており、これだけ見ると収納率を上げて職員は減っていないという風に見えるので、見せ方としてこれでよいのだろうか、と思う。

初田総務課長：ただいま御意見いただいた職員の増減については、正規職員では労務職員の退職者の不補充を行っており、基本的には非常勤職員、来年度からの会計年度任用職員で補充をしている。またその時々の短期的な行政需要のため、適した職員を充てているが、前期計画当時の平成３０年度の時点で補充した人件費が累積してこのような数字になっている。今後、これについては管理をしていきたいと考えている。

田形和幸会長：他に御意見等がないようであれば、本日の議事は終了とする。

豊後総務局長：第８期行革審ということで、昨年度の登呂、今年度の歴史・文化資源のネットワークの２回の提言をいただいた。みなさんから活発なご意見を拝聴して、市長をはじめ、関係局長も気持ちを新たにした。また、行革実施計画についても貴重な意見をいただいた。この２年間、皆様からいただいた御意見を行政に反映していきたいと考えている。

静岡市行財政改革推進審議会

田形和幸